
やっつけ兄弟

月猫百歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やっつけ兄弟

【Nコード】

N8628S

【作者名】

月猫百歩

【あらすじ】

果てしない広野に砦のような館がそびえ立つ。そこにあるのはキチガイなことばかり。

理不尽な日常の中で生活している、ある仲の良い「兄弟」と呼ばれる二人組。そんな彼らの記念すべき日は、兄の驚きから始まった。

水がしたたる薄暗い地下の道を、裸電球がゆらゆらと揺れながら暗闇にいくつものスポットライトを作っていた。湿気に塗れている壁は錆や汚れで酷く汚れていて、より地下を不気味に映し出している。

そんな不気味な通路を一人の人物がのんびりと歩いていた。クリーム色のターバンを頭に巻き、夜空のようなマントも小柄な体に巻き付かせている。機嫌が良いようで気に入りの音楽を口ずさみ、黒いブーツで水たまりを気にすることなく歩く。

見えてきた柵模様の看板。その横には白いドア。いつものように金色のドアノブをひねり、中へと入った。

「よお兄弟」

店内に入るなり声をかけられる。ミミズクの面がきよろりとカウンターに座る兄を見ると小動物のようにひよいと片手を上げた。

軽やかに段を上り兄の横に着くと、グラスを拭いている長身の男に、カウンターを叩いて合図する。白いシャツがゆらり動いて黙々と作業を開始する。頼んだのはいつもの料理だ。

「きいてくれよ兄弟。またご主人からご命令だぜ？　一昨日からまたやつつけ仕事の後始末だ」

うあーと言いながら兄は後ろに大きくのけぞった。そんなやけくそ状態の兄を見ながらミミズクの口元がはずされる。

「おいおい。口がまた汚れてるぜ」

カウンターのの上に丸まっていたおしぼりを口元めがけてミミズクになげつける。それを避けることなく面で受け止めると、遅い動作で摘みとり口周りを拭く。

「今度はバルブの締め直しに、手紙の配達だつてよ」

乱暴に懐から黄ばんだ羊皮紙を取りだして、また乱暴にはさばさと揺らした。

「まったくガキのお使いじゃないだぜえ？」

「おまたせしました」

愚痴を聞いていないみたいで懸命に口元をガシガシ拭いていたミミズクだったが、目の前に大好物が出されるとおしほりを後ろへ放り投げ、それを頬張り始めた。山のようなサンドウィッチに小さな口がかぶりつく。

「聞いちゃいねえな」

横目で兄弟を眺めながら深くため息をはいた。

地下水が垂れる中、兄は兄弟の頬を何度か叩いていた。暗いトンネルに弾けるような音がこだまする。

「おいしっかりしろよ！ おい！」

ミミズクがバルブを回した途端、勢い良く水しぶきが炸裂し、大砲の威力を持った水の固まりがミミズクを壁に叩きつけられたのだ。「背中を強く打ったのか？ 平気か？」

水を頭からかぶり全身びしょ濡れの兄弟。気絶しているのか微動だにすらない。

「おいおいおい。しっかりしてくれよ」

兄が再度、兄弟の頬を叩いたとき。ずるつとミミズクの顔が動いた。あつと思つたときには面が薄暗い地下水の中に落ちた。

「え……でえええ?!」

兄の奇妙な悲鳴が地下に響く。それもそのはずだろう。兄弟と言つて長年相棒として付き合っていた人物の素顔が女だったのだから。

皆この館にきた時のことは覚えていない。気づいたときにはこの色々な意味で異常な館で、それぞれ過ごしていた。

館の主は絶対。たとえ残酷だろうが奇妙だろうが優しかろうが、指示された仕事はこなさなければならぬ。たとえそれが子供のお使い程度だとしても。

兄はいつからかミミズクの面をつけた人物と一緒に仕事をするのが当たり前となっていた。ひとり仕事で仕事をこなしていたときもあったが、気づけば二人でお互いの仕事をするようになっていたのだ。

血も育ちも違えど、つねに一緒だった兄弟。兄は兄として、ミミズクを被る兄弟の面倒を見て、ミミズクは嬉しげに自分の事を兄弟と呼ぶ彼に付いて行っていた。

バスタブにお湯を張り、服を着たままの女顔を浸ける。付き合いは長かったはずだが、まったく女だとは知らなかった。いつもだったらだと長い服を身につけて一切言葉を発しなかった兄弟。まさか女だったとは。

「うっわ。参っちゃったな」

かゆくもない頬を何度が搔いて兄は眉を寄せた。

「まさか男ではなく、女だとは。くっそ全然分からなかったぜ」

風呂の出入り口に腰掛けてうなだれる。

兄はミミズクを女だとはまったく思っていなかった。というのも、異常によく食べる、女らしい仕草ゼロ。今朝の喫茶店でも見た通り、おしぼりを放り投げるなどのガサツな一面もあったからだ。

さてどうするかと頬杖をしてみるが、兄にとってミミズクが男だろうが女だろうが、特に関係ない気もしなかつた。今まで通りともに行動して、変わらずに兄弟として過ごせばいいんだと。

「お、大丈夫か？」

気が付いたようで、手をばたばたとさせながらミミズクを被って

いた兄弟が起き上がる。

「あんまりばたつくと、口に水がはいるぜ？」

手を差し出して兄弟が立ち上がるのを手伝う。

いつも頭に巻いていたターバンが無いため、漆黒の長髪が肩に流れている。頬に張り付いた前髪を払いのけ、指が顔に当たるのに兄弟は気づいた。ミミズクの面がないことを顔に両手を当てて確かめる様子に、兄は溜息混じりに言った。

「悪い。お前を運んでいるときに落としちゃまったみたいで。後で探すからさ」

気まずそうに視線を泳がせる。ミミズクは聞いているのかいないのか、何度か両の目をきよりと動かすと、犬のように身体を揺らし盛大に身体に付いた水を払った。

「ばっか、なにすんだ！」

突然の水しぶきに沈んだ気持ちも吹っ飛んで、いつも通りに兄弟のあたまを平手で叩く。兄弟は少し間があってから両手で叩かれた頭に手をおいた。

「あーったく。お前って奴は……」

顔に付いた水を手で拭いながら、兄弟の仕草を見て吹き出し苦笑する。

「とにかく身体拭けよ。服も貸してやるから着替えろ」

ミミズクは小柄だ。兄の服ではブカブカになってしまいが、元々ブカブカな格好をしていたので今更だろう。適当に見繕って服でも貸してやろうと兄は思案し、濡れ雑巾状態の兄弟にタオルを投げつけた。

自身もタオルで顔を濡らされた箇所を拭きながら居間に戻る。

「……なにしてんだ？」

イラッとして開口一番に目の前の人物に言う。

シルクハットとタキシードを身につけた骸骨。そんなイメージがぴったりな男が、足を組みながら優雅にコーヒーを飲んでいたので。

「いきなりご挨拶だね。お兄さん」

「お兄さんはヤメろ」

最高に不機嫌な顔を露骨にさせながら睨みつける。男は気にせず肩を揺らして笑うとコーヒーをすすった。

「何の用だよ。俺達はこれから配達なんだ。暇じゃねえんだ」

「私はわざわざ教えに来たのだよ」

ぶっきらぼうに言った兄を、哀れんだ演技たっぷりにわざとらしく顔を左右に振る。

「配達内容を確認した方がいい」

「は？」

兄は手紙を取り出し、期限を確認する。消印は「太陽の1」だ。まだ配達期限は六時間もある。

「別に急ぎじゃないだろ。これなら」

「良く手紙を観察した方がいい」

苛ただしげに手紙をよく見回す。別に普通の手紙で、封も宛先も特別変わったところはない。

「なんだよ。別になにも……」

言いかけて固まる。手紙の隅に米粒ほどの文字で『超速達』

「んだこれえええ！」

絶叫を上げながら風呂場に駆け込むと、まだのんびり髪を拭いている兄弟の濡れた襟を掴んで玄関まで引っ張る。

「やべえぞ兄弟！ 始末されるぞ！」

きよとんとしながらも兄の形相に圧倒され、襟首を解放されたところで、玄関からは自分で走り出すミミズク。

超速達なら「太陽の2」まで配達しなければならぬ。普通の手紙なら遅れた事を謝罪すれば済む話のだが、館の主からの命令ならそうはいかない。主の命令は絶対。配達しろと言われたら時間までにするしかないのだ。

兄は腕時計で時間を計る。だいたいあと五分。

「くっそこれ完全押しつけじゃねーか！」

押しつけかどつかはともかく、この手紙がどういった経緯で兄弟に依頼されたかは主のみぞ知るところだが、とにかく急いで宛先に届けなければならない。

「仕方ねえ。近道するぞ」

兄が強盗しながら廊下のドアを蹴破ると、そのまま突っ走る。あとに続くミミズク。幸か不幸か住人は留守だったみたいで誰もおらず、足下に紙屑が散らばり二人が駆け抜けるたびに舞い上がった。

「よし。ここから飛び降りるぞ」

窓に足をかけて手招きする。とても館の中だとは思えない光景だとミミズクは思った。兄が窓から飛び降りるのに続いて小柄な影も火の輪くぐりのライオンの如く、開いた窓に向かって飛び込む。ズダンと錆びたドラム缶の上に着地すると金臭いものが鼻をついた。部屋の外はまるで屋外のような通りが広がり、本当に外に出たような錯覚が起きる。

「ぼけつとすんな、兄弟！」

兄に肩を叩かれのんびりしようとした思考が止まる。すでに走り出した兄の後を追ってドラム缶から飛び降りた。

そこへちようど向かいの道に、一人の男が店のドアを開けて外に出てきた。ミミズクは羊皮紙に描かれていた男の顔を思い出し、目を丸くした。宛先の男だ。

「待たんかああああ！」

兄は叫びながら、たった今店から出た男の足下に、いつも持ち歩いている小型のナイフを投げつけた。男は突然踏みだそうとした先に現れたナイフに驚いて、後ろに飛び退いて尻餅をつく。

そんな不幸な男に兄は飛びかかり、馬乗りになると状況が把握できないうる相手に手紙を押しつけた。

「受け取れ！ 殺すぞ！」

なんだそれ。とその場の誰もが思ったであろう。男は兄から半ば強引にそれを受け取ると、切手を剥がした。あたりに甘い香りが広がる。様々な隙間を縫って、香りが主の元へ報告に行ってくれるこ

とだろう。これで受領完了だ。

「はーったく。死ぬかと思っただぜえ」

腕時計の時刻を眺めながら盛大に安堵の息を吐いた。兄から解放された男は、その場から逃げるように去っていく。闇に消えた男をミミズクは目で追い、そのあと肩で息をしている兄を見た。

「まあともかくだ。これで始末されずにすむ」

手のひらをかざした兄にミミズクがいつものように、そこに平手を打った。

「部屋に戻って休もうぜ兄弟」

こくり頷く無表情の女顔。そのまま先に濡れたブカブカのコートを引きずって歩き出す。

兄はその背中を見て、ミミズクの面の下から現れた顔を思い出す。切れ長な目に長いまつげ。白い肌。そして小さな顎。物を食べるときにだけ口元が外されていたので気がつかなかったが、横からまじまじと眺めると、女性らしい先の尖った顎だ。こんな小さな顎でよく食べていたものだ。と兄は回り込んで兄弟の顔を見つめ続ける。

ミミズクだった顔は怪訝そうに歪み、のぞき込んだ顔に爪を立てた。「痛て！ なにすんだ！」

怒鳴る兄。それを後目に、一度振り返ってぺろつと舌を出す。そのままリスにも負けない機敏な動きで、また兄の部屋へと戻っていく。

兄は舌打ちをして兄弟の後を追った。

「で、なんでまだ居るんだ？」

兄はよほどこの男が気に入らないらしい。見つけた途端、失礼キマワリ無い言葉を吐いた。

「相変わらずキツイね。まあ、座りたまえ」

なんで自分の家で席をすすまねなくちゃいけないんだと兄は不満

だったが、男の改まった様子に渋々席に着いた。

「さて。君たちは一人の依頼を二人でこなしているみたいだね」

「ああ。悪かったか？ 特に一人でやれとは指定されていなかったから、ずっとこいつと一緒にやってきたんだが」

「この……ひよつと君とかな？」

「は？」

ひよつとこ？ 後ろに立っているはずの元ミミズクの顔に振り返る。

「おわつ。お前それどこから拾ってきたんだ！」

ミミズクの顔は今やひよつとこのお面に変わっており、兄の言葉に兄弟はどこか誇らしげに胸を反らした。

「ばかやろう！ 捨ててこい！」

いやいやと元ミミズクは頑なに首を振る。兄は椅子の背もたれから兄弟の服を掴んで面をとろうとするが、その手をひよつとこに噛まれた。思わぬ攻撃に叫び声をあげる兄。

「まあまあ。それは良いとして、今後の依頼のこなしかたなんだが、両者の攻防をしばらく観戦していたシルクハットの男だったが、両手を組んで身を乗り出した。その様子に噛まれた手をさすっていた兄は、ただ事ではなさそうだと向きなおり、自身も前のめりになる。

「ご主人様から君たちを一組として考えても良いと、そうお話を頂いたんだが」

「一組？」

「ようするに、今まで二人でこなして一人分の報酬だったのを、一人の指定がない限り、二人分出そうじゃないかと仰られてな」

「ほんとかよ！ やったぞ兄弟！」

興奮気味にひよつとこ顔に叫んだ。

「ただし」

男の低い声。喜ぶ兄はぴたりと動きを止めて、シルクハットの男に向き直る。

「ただし？」

「そう。ただしこの依頼をこなしてからだ」

おもむろに男は胸ポケットからカードを取り出し、テーブルの真ん中まで滑らした。

「依頼だあ？ …… って、なんだこれえ！」

ぶるぶると震える兄の手に握られたカードには、一言書かれていた。

「脱走したマロンちゃんに鈴の首輪をつけること」

「なあ、支配人」

「はい」

「マロンちゃんって、あれだよな」

「なんでですか？」

「あの実験に失敗した凶暴化け猫だよな」

「ご主人様のペットです」

兄はカードを殴り捨て、シルクハットの男、もとい支配人の襟を掴んで激しく揺さぶった。

「ばつかじゃねえの！ あんなの相手に出来るか！ だいたい何で

脱走してやがんだ！ ちゃんと飼えよ！」

「なかなかお転婆な子でねえ。はっはっは」

「笑い事じゃねえええ！」

兄に揺らされてもなおコーヒーをこぼさず笑う支配人。それを眺めていた兄弟は一人感心していた。

「まあ待ちたまえ。もし成功したらこれもあげよう」

支配人が胸ポケットに手を突っ込む。ポケットがみしみし不穏な音を鳴らしながら、一つの仮面を吐き出した。

「それ、どうなってるの？」

「ついさっき届けられた君たちの落とし物だ」

兄の疑問をさっくり無視して支配人は仮面を掲げた。それは紫の

光沢のあるミミズクの面だった。

「あげようって、それこいつの落とし物なんだからこいつに返せよ」

「この館にあるもの、全てご主人様の物だ。忘れては困るね」

皮肉げに支配人は笑う。

「依頼をこなせば報酬は二人分。ミミズクの面も返そう」

「うーむ」

兄は腕を組んで悩んだ。報酬は魅力的だ。ある意味この世界で生きるには報酬はかなり重要となってくる。それに兄弟の面も取り戻せる。しかしハイリスクな内容だ。

「よしっ」

兄は決心した。

ことの成り行きを見守っていた兄弟に向き直ると、その両肩に両手を置いて言い放った。

「あきらめようっ」

「……」

清々しいほど言い切った台詞に部屋は静まり返った。

ほどなくしてひよっとこ顔の兄弟は、兄に幻の左ストレートを叩き込む。

「だってよお前。あんな化け物に鈴つけんだぞ！ どう考えたって無理だろ！」

曇り空のような床で頬を押さえながら、兄はひよっとこに訴えた。しかし兄弟は激しく首を振ってしきりに支配人が持っているミミズクの面を指す。こころなしに指している人差し指がプルプル震えていた。

「諦めろってえ。アメちゃんやるからあ」

兄の説得もむなしく、ひよっとこ顔は譲らず何度も残像が残るほど首を振る。それでも渋い顔をする兄に、ついに兄弟は泣き出しその場に崩れた。

「おいおい、なにも泣くことはないだろう」

床に這いつくばっておいおい泣き出す兄弟。その背中を見つめな

がら、兄は深くため息をついた。

「分かった。分かったよ兄弟。やってやるうじゃねえか」

結局兄は折れた。丸まって震えていた背中がピタリと止む。屈んだ姿勢から、兄弟は素早く猫のように兄に飛びつきしめつた服を寄せた。

「やはり君たちは仲が良いね」

「るっせー。見てんじゃねえよ」

乾ききっていない服で抱きつくひよつとこ顔を押し退け、支配人を睨む。ひよつとこでなければ、思わず頬が緩んだかもしれないが、と少し残念に思う兄だった。

「健闘を祈るよ」

支配人は二人に優しくほほえむと、コーヒークップに口を付けた。

兄はその巨体を前にして、激しく後悔していた。

やはり依頼は蹴ってしまった方が良かったと。

この場には不釣り合いなひよつとこ顔。その面を被っている人物の肩からは痛々しい傷が見えた。兄から借りた衣服は引きちぎられ、見るも無惨。息も絶え絶えで苦しそうだった。

「おい兄弟。大丈夫か？」

掛けられた声にくくりと頷くひよつとこ。兄は手に持った丈夫な槍を持ち直すと、横に転がって飛びかかってきた影から身をかわす。「参ったな」

呟きながら体勢を直してこちらを睨む巨体に身構えた。

噂では実験に失敗した猫科の動物が、なんらかの効果を発揮して牛ほどの大きさにまで成長したようだった。性格も凶暴。兄が見た限りでは、とても人に懐くようには見えなかった。

「おい、兄弟。とりあえず逃げるぞ」

猫の陰になつてゐる兄弟に合図する。このままでは二人とも殺されてしまう。死んでしまつては元も子もない。

広い倉庫におびき寄せたまではよかつた。木箱の死角を利用して猫に近づき、それとなく鈴をつける筈だったのだ。しかし何故か猫が急にこちらに気付き、襲つてきた。

鋭い爪が壁にいくつもの傷を作る。石の壁でも化け猫にとっては意味がないようだ。近場の木箱に身を隠し、額から流れる汗を拭う。「何か意表でも突ければいいんだが」

それにしても何故か兄弟ばかり狙われていることに、兄は内心首を傾げていた。鈴は兄弟が持つているが、鈴の音が猫に聞こえないよう事前に小箱に閉まつてあるはずなのだが。

兄弟が猫の爪から逃れ、素早く木箱の山に飛び乗るが、相手は猫そのあとを軽々と追ってくる。肩の怪我をかばいながら、ひよつとこ顔は木箱の上で猫とにらみ合あう。おどけた表情の面から覗く瞳は、ギラギラと熱と生命に溢れていた。

猫はしつぽを右へ左へとせわしなく動かす。まるで喜んでいようにも見えた。姿勢を低くし、今にも兄弟に飛びかかろうとしている。

「こつちだ化け猫！」

兄は木箱から飛び出し、猫に向かって叫ぶ。声は倉庫内にわんわんと反響したが、猫はただ耳をハエでも払うかのように動かすだけだった。

「こんのバカ猫があつ！」

無視すんな！ と持っていた槍を振り上げ猫めがけて投げる。槍は唸りをあげて猫の背中に突き刺さつた。

叫ぶ猫。丈夫の毛皮のせいか刺さり甘かつたようで、木箱の上に槍が転がり落ちた。全身の毛を逆立て、槍を自分に投げつけた相手に振り返る。

「今のうちに逃げろ！」

猫がこちらに気が向けているのを確認して、兄は兄弟に叫んだ。

兄弟はふわりと木箱から飛び降り、猫の前から移動しようとした。

……したのだが。

「兄弟！」

宙を舞う小さな体。逃げようとしたのを素早く猫に気づかれ、鋭利な爪に吹き飛ばされ木箱の山に突っ込む。

もうもうと長い間溜まった埃が、倉庫中に立ちこめた。

「平気か！ 返事しろ！」

埃を吸い込まないよう、口元を腕で庇いながら辺りを見回す。木箱が崩れ落ちる音がうるさく響いて肝心の兄弟と猫の音が聞こえない。

神経を研ぎすませて静かになるのを待つ。

視界を遮っていた粉塵がようやく晴れて見えるようになってきた。足音を立てないよう、気を配りながら手近な木箱に身を隠す。しばらくじっとしていると、目の前を鈴の入った小さな箱が床の上を滑り、通り過ぎた。そしてすぐに猫がそれに飛びついて、しきりに箱に顔を擦りつけている。

「なにしてんだあの化け猫」

完全に癒し系の顔になった猫を、兄は眉を寄せて眺める。まるでマタタビでも与えられた猫そのものだ。

「ん？」

自分の隠れている木箱の横から、物音が聞こえた。猫を気にしつつも姿勢を低くさせて移動する。崩れた木箱から手が見える。兄弟だ！

「おい平気か？」

兄は駆け寄り、そっと声をかけた。木箱の陰からひよっと顔が覗き、よろよろと隙間から這い出てきた。

「ひでえな」

出てきた兄弟は埃まみれで、破れたところから見える肌には痣と擦り傷があった。こんなにヒドい状態の兄弟をみるのは初めてだった。

「なあ兄弟。この依頼、蹴らないか？」

兄は肩で息をしている兄弟に、言いづらそうに切り出した。

依頼を蹴るのは別に珍しいことではない。この兄弟も何度も困難、もしくは面倒だと判断した依頼は断ったことがあった。もちろんタダで断る事は不可能なので、支配人を通してうまく主人と交渉するのだが。

今回は命令ではない。断ることが可能な依頼。あのミミズクの面は兄弟にとって大切なものかもしれないが、兄はこれ以上、兄弟が傷つくのをみたくなかったのだ。

苦しそうな吐息がすぐそばで聞こえる。兄はこの場から兄弟を連れ出そうと腕をつかんだが、その手を強く握り返される。

「兄弟……」

心配そうな兄をひよっとこの仮面の下から、目を細めて見つめる兄弟。顔こそ見えなくても長年の勘で、兄弟が笑ったんだと兄は分かった。

「でもよ。お前こんなにポロポロなのにごうするんだよ」

深く息を吐きながら眉を寄せる兄に、兄弟はにんまりと目を弓のように曲げると、木箱の瓦礫からなにかを取り出した。

「これは……」

木箱を転がし、顔にする寄せる猫の表情は恍惚としていた。喉をごろごろ鳴らして悩ましげな仕草を繰り返す。

猫は小さな木箱から漂う匂いに完全に酔っぱらって、ただ気持ちよさに身を任せている。

「よしっ今だ！」

突然、聞こえた人間の声。しかしハツとした時には遅かったのだ。爆音とともに、大量の木箱が自分に降り注ぐ。

猫はいくつかの落下物をよけることは出来たが、雪崩のような箱の大群をかわすことは出来なかった。騒音が静まり返った頃には完

全に猫は伸びていた。

「おいおい。死んじまつたか？」

陰に隠れていた兄弟たちは、おそろおそろ猫に近寄り、兄は回収した槍の柄で猫の肉球をつつく。

「それにしても爆薬みつけるとは。やるなあ兄弟」

ぐつと親指を立てて、兄弟は兄に胸を反らした。

兄弟が猫に吹き飛ばされ木箱の山に埋もれた時、兄弟は一つの木箱から導線のついた筒状の爆薬をみつけた。それを猫の上に被さるよう積み上がった木箱に爆薬を仕掛け、持っていたマッチで火をつける。すると驚くほど上手く猫の頭に木箱たちがクリーンヒットしたのだった。

「さつさと猫に鈴つけて、ずらかろうぜ」

猫の手元に落ちていた小箱を拾い上げ、蓋を開ける。

「うっわ。なんか変な匂いするぞ」

反射的に鼻をつまむ。小箱からは言いがたい奇妙なおいが漂っている。

「お前何の箱使ったんだ？ なに入ってたんだよ」

まるで汚いものでも扱うように小箱を指先で持ち直すと、兄弟へと投げる。

「さつさとつけようぜ」

受け取った小箱から鈴を取り出し、猫へと忍び足で近寄って革の首輪に取り付ける。大きな鈴でコロコロと鈴にしては野太い音が鳴った。

「よしっ。こいつが起きる前に帰るぞ！」

きびすを返して倉庫の出入り口に向かう。が。

「ま・じ・か・よ」

出入り口は木箱の山で塞がれていたのだ。がくつと兄はうなだれて壁に手を突いた。

「これどうやってどかさなんだあ」

天井を仰いでうわーっと兄は雄叫びをあげる。ひよっこの顔も、

珍しく疲労したように大きく息を吐いた。

「これどうする？」

分らないと兄弟は首を傾げる。

「どうやって倉庫から出る？」

さあと言いたげに兄弟は肩をすくめる。

「俺疲れたぜえ」

お疲れさんとも言いたげに兄の背中を叩く。

「やっとゆっくり……」

言い掛けて、背後から聞こえた音に二人とも石像のように硬直した。恐る恐る振り返る。背後には怒りを露わにパンパンに膨らんだ毛を逆立てた猫が睨んでいた。

「どうする兄弟」

じりつと身構えて視線を猫から外すことなく声を掛ける。兄弟のほうも顎に垂れる汗を拭いながら、いつでも動けるように腰を落としている。

猫は相当怒っているようで目をこれ以上ないほど見開き、血走らせていた。

「後ろは塞がれてるし、前には化け猫。最悪だな」

自嘲気味にはき捨てた。これでは依頼を蹴ったとしても逃げられないのでは意味がない。死体となって部屋に戻るのはごめんだと兄は苛立った。

「さてどうするか」

猫が今にも飛びかかろうと姿勢を低くする。兄はすぐに横にいる兄弟を突き飛ばせるよう準備した。

ふと兄弟が身じろぎ、持っていた箱に何かを入れている。足を滑らせながら後退し、後ろの木箱にその小箱を置く。なにしてるんだと兄が思ったとき、猫が動いた。

猫の目がざらりと光る。兄はその眼光を素早く感じると兄弟の方向へ横っ飛びし、傷だらけの体に飛びついた。すぐ背後で猫が自分の体すれすれに通っていくのを感じる。猫はそのまま木箱に突っ込む

と同時に爆音が響いた。

「ん？ 爆音？」

疑問に思うもすぐさま兄弟を下敷きにして、床に突っ伏す。また砂埃が舞い視界が見えなくなるが、今度は猫の居場所がはっきりと分かる。霞む視界のむこうで鈴が忙しそうに鳴っているのだ。

「おい起きろ兄弟！ 今がチャンスだ」

下敷きになっっているハズの兄弟を起こそうと腕を伸ばす。しかし掴んだ感触がおかしい。

「あれ、お前こんなに贅肉ついてたか？」

腹を掴んだと思い、指で思い切り掴んでひっぱる。

「うっっ」

突如横っ腹に突然蹴りを食らい、体をしならせる兄。涙目になりながら呻いていると、いつの間にか起きあがった兄弟に腕を引っ張られる。

「お前、なんでいきなり蹴りを入れたんだよ！」

文句を言うが返事はない。その足取りから怒っているのは分かったが、兄はなぜ兄弟が腹をたてているのか分からなかった。贅肉と言ったのがまずかったのだろうか。

未だに怒り狂っている猫から遠ざかり、倉庫の隅に行き着く。向こうの方では猫が暴れているみたいでバリバリ何かを引っかく音が聞こえる。

「どうする？ 出口あっちだぜ？」

そう兄が呟くと、すぐ間近でまた爆音が響く。爆風に飛ばされ兄が吹っ飛ぶ。なんだかでんぐり返しを繰り返すし、兄弟に怒鳴った。「な、なにしてんだよ！ 危ないだろ！ もうちょっと考えて」

もうもうと立ちこめる砂煙。それが薄くなると兄弟がそこに突っ立って親指をたてていた。その横には焦げた壁と大きな横穴。兄弟は倉庫の壁を爆薬で吹き飛ばしたようだ。

「お前……」

つかつかと自慢げな兄弟に近寄り、がしりと頭を掴む。

「グツジョブ！ 兄弟！」

親指を立ててその背中を叩いた。二人は壁を破壊したことなどに気にせず、暴れる猫を後目に倉庫から脱出したのだった。

薄暗い地下を、よごれた二人が歩く。兄は予期せぬ爆発のおかげでところどころ焼け焦げて、兄弟は割れたひよつとこの面をさすりながら、肩の傷の具合を眺めていた。

「お前さ、猫が飛びかかってきたとき何かしたのか？」

兄が問うと、兄弟はぼろぼろになったズボンのポケットからマツチ箱を取り出した。そして手で筒の形を表す。

「あの箱にマツチと爆薬入れたのか」

そうそうと兄弟は頷き、さらに袋を取り出した。中を広げて見せてくれるが、なにも入っていない。それどころか変な匂いまでする。「げっ。その匂いあの箱からもしたぞ。中身は何なんだよ」

兄弟からその袋を受け取り、そこに縫われているラベルを見つけ読んでみる。

「マタタビ？」

これですべて兄は合点がいった。兄弟ばかり狙ったのはマタタビの匂いが残っている箱を持っていたからだ。小箱にじゃれていたのもこれで頷ける。

「それにしても、あの化け猫大丈夫か？ 死んでなきゃいいんだが

……」

報酬と館の主人の機嫌を損ねないか。兄は心配そうに呟いた。

部屋にコーヒートの芳しい香りが漂う。兄弟は鼻をひくつかせながら、満足げにミミズクの面を撫でていた。

「良かったねミミズク。やはり君はミミズクの名がっている」

「別にひよつとこの面被つてもミミズクで良いだろ」

向かいに座っている支配人にぶっきらぼうに言い、コーヒーをすすった。ミミズクの面を被る兄弟も、今は大人しく兄の横に座って、コーヒーカップを両手で包んでいる。

「猫は元気か？」

死なれたらたまらんと、渋い顔をする。たとえ死んでいなくとも、重傷になって主人の怒りを買えば報酬はパアだ。それどころか処刑されかねない。

「彼女は元気だよ。髭が焦げていたがね」

すかさずミミズクの両目が明後日の方向を向く。

「まあ元気なら良かった。でもよ、そうとう暴れていたが、あのまま野放しにして平気なのか？」

「その処理は他の者に依頼するつもりだった」

「依頼された奴はたまったもんじゃないだろうな」

不幸な誰かの健闘を祈るように、兄がカップを気持ち少し掲げる。それを見た兄弟も同じように動作を真似た。

「さて。君たち兄弟はこれから基本一組として扱うことになる。これから頑張ってくれたまえ」

そう言つて支配人がおもむろに胸ポケットから用紙と万年筆取り出す。興味津々にミミズクが乗り出そうとするが、兄に襟首を掴まれ席に戻される。

「ここに君たちのそれぞれの名前と、君たち二人を指す名前を記入しなさい」

万年筆を受け取った兄がまず自分の名前を書き、字が書けない兄弟の代わりにミミズクの名前を記入する。

「チーム名かあ。迷うなあ」

兄は迷った。兄弟という言葉を入れたかったのだが、兄妹に書き換えた方がいいのかとペンを止める。唸る兄に横にいたミミズクが肩を組んできた。親指を立てて首を傾げる様は、笑んでいるように

見える。

「そうだな。今まで通りで良いか」

兄は兄弟と。書類に書いた。

「これからもよろしくな。兄弟」

かざした手にミミズクは自分の手を打ちつけて、乾いた音を響かせた。

「では君たちは正式に基本一組として扱うことにするよ。これからも我らのご主人様の為に尽くしてくれたまえ」

支配人はコーヒーを飲み干し、喜び合う兄弟たちに笑いかけた。

ただこの兄弟は分かっていたのだ。

兄弟として活動することになったと同時に、さらに理不尽な厄介事を押しつけられるのだと、この時はまだ気付いていなかったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8628s/>

やっつけ兄弟

2011年9月7日03時27分発行